

解答

1	B	2	A	3	C	4	D	5	C
6	C	7	D	8	B	9	A		

コメント

ミツバチに関して、本文に照らして正しい選択肢を選ぶよう求める問題。

A の「最初に組織だって利用されたのは、キリスト教の修道院(monasteries)においてであった」は第 4 段落第 2・3 文にて、紀元 400 年ごろ、ローマ帝国が解体するまで、エジプトとイスラエルは組織だった養蜂施設を発展させ、その後キリスト教の修道院が養蜂施設(apiculture centers)としての役割を果たしたと述べられていることと食い違う。

B の「属(genus)の蜂(branches)は蜂の形によって決まる」は、第 1 段落第 2・3 文に同じように

Cの「人間の活動がハチの繁殖率を高めた」については、本文からは読み取れない。人間の発明によってミツバチの1つの属である *Apis* はミツバチがどのように巣を作るかによって3つの枝に分けることができると述べられていることと合致する。

Dは「啓蒙(the Enlightenment)の時代の間に、4つの発明が養蜂の利益を向上させた」という意

味。第 6 段落第 1 文から、上記のような 4 つの発明がなされたのは 19 世紀であることが分かる。対して啓蒙の時代については第 4 段落第 4 文で触れられているが、これが具体的に何世紀のことであるかは明らかにされておらず、啓蒙の時代が 19 世紀に相当すると判断する根拠はない。

正解はB。

2 *Apis mellifera*が農業で使われる主要な種になった理由を問う問題。第5段落第1・2文では、17世紀に戦争や貧困などを逃れたヨーロッパの人々がアメリカ合衆国に養蜂技術を持ち込んだこと、その一方でイングランドの入植者はハチをニュージーランド、オーストラリア、そしてタスマニアへ持ち込み、世界中での *Apis mellifera* の使用を拡大したことに言及されている。

選択肢を見ると、Aは「それは人間の力を借りた移動によって拡大した」という意味で、第5段落の記述と合致する。Bは「それは北アメリカで自然に見つかる」、Cは「それは蜂群崩壊症候群を生き抜くことができる」、Dは「それは他の種よりも攻撃的でない習性を有している」はいずれも本文で述べられてい

3 養蜂がより市場性のあるものとなった過程を選ぶよう求める問題。第 6 段落第 1 文にて、養蜂は 19 世紀の間に、4 つの発明をもって、蜂蜜やその他の製品向けとして、商業的に採算の見込めるものとなったことが説明されている。

A は「開発計画が非常にうまくいった」という意味だが、第 7 段落第 1 文と合致しない((9)の解説を

参照)。また、同文は、この設問で問われていることの理由・様態の説明として述べられているのでもない。

B の「遺伝学が世界的に促進された」は本文から読み取れない。第 7 段落第 4 文で、ミツパチの遺伝

多様性の促進に言及があるが、これは将来の持続可能な農業に向けた重要な措置と見做され、また、第 4 段階第 3 の本質、5 つ目の發明とも一致する。

は「接ぎ木」や「移植(術)」などの意味)が挙げられ、養蜂家が遺伝に干渉できるようになったことが述べられているが、遺伝学的世界的な促進について述べられているわけではない。

Dの「蜂蜜」

得ない。

正解は C。

4

Apis mellifera について誤った選択肢を選ぶよう求める問題。

Aは「健康な群集は、複数の世代から成る」という意味。*Apis mellifera* を含むミツバチの一般論を

述べている第 2 段落第 7 文にて、理想的には、健康な巣は重なり合う複数の世代の集合であると述べられている。A は同文と合致するので、正解にはならない。

B は「過酷な環境で生きることのできるものもいる」という意味。第 1 段落第 2 文で *Apis mellifera*

Cは「それらの活動が食料生産の方針を決定付ける」という意味。第6段落第4文にて、ミツバチは

でも効率のよい花粉媒介者であり、工業諸国が移動による授粉とミツバチの 1 つの *ellifera* に依存する特殊化された農業を発展させたほどである、と述べられている。

も正解には
Dは「様々な

5
空所(5)に補充するのに適切な語はどれか問う問題。空所に入るのは動詞である。その主語として Honeybees「ミツバチ」があり、空所直後に pollination「授粉[送粉]」という名詞があることから、空所には他動詞が入る。つまり、空所に当てはまる動詞は「ミツバチ」が「授粉[送粉]」に対してする行

える」を用いて provide A for B で「A に B を供給する」の形とすれば、「ミツバチは作物、果樹園と花に授粉(作用)を供給する[授粉を行う]」という適切な意味の文が成り立つ。

いではないが、第 6 段落第 4 文から、ミツバチ自身が花粉を媒介する主体であることが分かる。どう影響するかを明らかにしない A よりも、C を用いた場合の方が適切である。B の「…を集める」、D の「…を利用する」、E の「…を発明する」は、いずれも「授粉」という作用に対してする行動として不適切。正解は C。

continents [...] Antarctica「(略)などの、今日の諸大陸」である。formed は「…を形成していた」などの意味となるところ、今日では複数に分かれ諸大陸となっているものが、およそ 1 億 3000 万年前に形成していた単一のものを指す語として適切なのは、C の「陸塊[広大な土地]」である。A は「領域[領土]」、B は「領域[王国/国土]」、E は「領域[領土/広大な土地]」などの意味であるが、これらは現実の空間を指す場合には、国家や統治者の存在を前提とし、人為的に作り出される空間を示す語である。よって、1 億年以上前に大陸が形成していた単一のものを指す語として不適。D の「国境[限界/最

先端」]も、やはりある土地から形成され当時存在していたものとしては不適。正解は C。

7

下線部(7)を含む第 3 段落第 3 文の Germinating [...] climate は、それ以降の節に先立つ分詞構文となっている。よって Germinating の意味上の主語は節の主部 flowering plants called angiosperms「被子植物と呼ばれる、花をつける植物」となる。Germinating 直後の in 句は「温か

は「温かくて乾いたゴンドワナ大陸の気候」において「花をつける植物」がどのような状態であったのかを示す語である。また、節部分では、こうした花が、昆虫を引き付けるための色や花びらの模様を発達させたと述べられている。

選択肢の動名詞の原形の意味は、A が「達成する」、B が「…を汚染する」、C が「休む」、E が「引っ張る〔努力する〕」などの意味。花をつける植物が、昆虫を引き付けるための色などを発達させた状況を示す上で、温かくて乾いたゴンドワナ大陸の気候でその花が上記のような行為・作用をしていたというの

は不自然である。D の原形の意味は「咲く」という意味だが, germinate がこれと同じような意味であれば, 下線部を含む文の Germinating [...] insects は, 上記のような気候で咲いていた花が, 昆虫を引き付けるための色や花びらなどを発達させたという自然な意味となる。実際, germinate は「芽生える」などの意味である。正解は D。

8

空所(8)には、ダッシュに括られた挿入の前の its morphologies「その形態」と、直後の increased fuzziness, pollen baskets, longer tongues, and colonies to store supplies「増えた毛、花粉かご、長くなった舌、そして食糧を保存するための巣」との関係適切に表す語が当てはまる。

第3段落第1文では、ミツバチは、舌の短いアナバチ群から進化し、1億3000万年前に出現したと述べられている。第2~4文で、この当時に、花をつける植物が昆虫を引き付ける模様などを発達させ

ことや、その

述べられており、挿入部分ではそれほとりわけ花粉と花蜜を集めるためのものだと言われている。そして空所後では花粉がごより長い舌という要素が挙げられており、これらは先の目的に資するものと言える。このことと、元々ミツバチは舌が短かったとされていることを踏まえると、これら空所直後の名詞句が指すものは、1 億 2000 年前になってミツバチが発達させたもの、すなわちミツバチが発達させた形態の具体例であると考えられる。

上記の考察から、空所に補うべき語句は B の「…のような」となる。morphologies が分からなくと

9
空所(9)には「地方の経済開発計画」が「ミツパチ」に対してする行動を示す語が当てはまる。直前の段落では、美峰は、19世紀に産業的に振興の見込めるものとなったこと(第1文)、ミツパチは、工業誌

がそれに依

解答									
10	C	11	A	12	A	13	D	14	A
15	B	16	A	17	D				

コメント

10
下位中産階級の人々がより「正しく」話す傾向にある理由が問われている。第 3 段落第 2 文にて、彼ら（＝言語と社会学が交わる部分を専門とする言語学者）は下位中流階級の人々が、自分たちの発言[話し方]が評価されているという状況においては、上位中産階級や裕福な人々よりも、「正しく」話す傾向にあるということを発見したということが説明されている。また、第 3 文では、ギンズバーグ判事（Justice Ginsburg）が労働者階級の訛りを抑圧したのは（第 2 文で言われているような事例の）完璧な一例であり、彼女がそれ以来異なる階級へ移動し、自分が『証明』すべきものがないと無意識的に感じているという事実もまたそうであると述べられている。これらのことから、下位中産階級の人々がより「正しく」話す傾向にあるのは、自分たちの発言が評価されており（つまり聞き手はその発言を評価している）、何かを「証明」しなければならないと感じているからだと考えられる。こうした記述を踏まえて、選択肢を考察する。

- A は「言語の差別は幼いころから始まる」、D は「下位中産階級の人々は典型的に優れた英語を話す」という意味だが、こういったことは本文で述べられていない。
- B の「英語話者はフランス話者よりも賢いと認識される」は、第 4 段落第 3 文の内容と関連するが、これは下位中産階級の人々がより「正しく」話す傾向にある理由とは関係がない。
- C の「人々は他者を、彼らが話すときにどのように聞こえるかという点から理解する」は、発言[話し方]が評価される状況において下位中産階級の人々がより「正しく」話す傾向にあるという第 3 段落第 2 文の内容を適切に表していると言える。

正解は C。

11
なぜ筆者が、ギンズバーグ判事が「証明」すべきものが（これまでよりも）あまりないと感じていると考えているかが問われている。第 3 段落第 3 文では、ギンズバーグ判事が労働者階級の訛りを抑圧したのは（下位中産階級が、より上の階級より「正しく」話そうとするといった事例の）完璧な一例であり、彼女がそれ以来異なる階級へ移動し、自分が「証明」すべきものがないと無意識に感じているという事実もまたそうであると述べられている（「…のと同様に」の意味の as が導く節においては、主部と述語動詞が倒置されている）。この第 3 文のうち、having の導く分詞構文が、それに続く節の内容の理由のない経緯に当たると考えられる。このことを踏まえて選択肢を考察する。

- A は「彼女の現在の社会的地位のため」という意味である。第 1 段落第 1・2 文と注から、彼女がかつて訴訟人(litigator)であったことと、この記事の執筆時点である 2020 年には最高裁判事であったことが分かる。こうした地位・階級の変化を示唆する A は、第 3 文の分詞構文部分の内容を適切に反映していると言える。
- B の「彼女は上位中流階級よりも正しい話し方をするため」と、C の「彼女は彼女の労働者階級の訛りを抑えることができるため」は、第 3 文が第 2 文の内容の完璧な例として述べられていることから、本文で示唆されている事実としては妥当であると言える。しかし、第 3 文分詞構文部分で述べられている理由を排して、これらがギンズバーグ判事が上記のように感じる理由だと考える根拠はない。
- D は「若い訴訟人としての彼女の仕事のため」という意味。これは第 1 段落第 2 文と関連するが、同文では、この当時彼女が労働者階級の訛りを抑圧していたこと（そして、最高裁判事である本記事の執筆時点では、その訛りを隠していないこと）が示されている。つまり若い訴訟人であった時代は、彼女は（自らが、より上の階級の間人などということを、話し方により）「証明」すべきだと考えていたことがうかがえるので、D も本設問で問われている理由として不適。

正解は A。

12
空所(12)を含む文では、人は、後で学んだ言語で浴びせられる罵声より、母語で浴びせられた罵声(curses)によってより感情を刺激されるということが述べられており、空所に入る副詞はこの「より感情を刺激される」様態を示すものである。第 6 段落第 2 文では、キンズラー(Kinzler)が、言語がどれだけ人間の脳に対して刷り込みを行っているか、また人間がそれに対して敏感であるようにかに神経学的に条件付けられているかを明らかにしている、とある。また、このことの説明として第 3 文では、たとえ幼少期の後、言語を失い、大人になってもはやそれを話さずとも、母語によって永久に刻み込まれた、深層の神経の設定のために、それを学ぶことは簡単だと述べられている。このように、1 つ目の言語、すなわち母語による刷り込みに対し人々が敏感であるといったことが述べられているのであるから、それ以外の言語による罵声に対してよりも、1 つ目の言語で浴びせられた罵声に対して、人々はより強い反応を示すと考えられる。

選択肢の語の意味は順に、A が「深く[心から]」、B が「社会的に」、C が「ゆたかに」、D が「慢性的に[絶えず]」、E が「厳重に」や「正確[厳密に]」である。このうち、A の「深く」を当てはめれば、母語による罵声によって、より深く感情を刺激されるという意味となり、先立つ 2 文と合致する内容となる。E は、「厳しく」という訳も当てられるが、規則の適用などに対して用いられるものであり、ここで用いるものとしては不適切。

正解は A。

13
カナダでの実験が主に示していることが何か問われている。この実験については第 4 段落に記述がある。その第 1 文では、この実験が行われた当時、カナダでは英語の方がフランス語より格式高い（prestigious）と見なされていたことが指摘されている（Montreal「モントリオール」はカナダの都市である）。そして、第 2・3 文以降では、同一話者が英仏両方の言語で文を読み上げたとき、英語を話すカナダ人もフランス語を話すカナダ人も、英語の話者の方がより賢く、フランス語の話者はより温かく、友好的だと考える傾向にあったことが述べられている。そして、第 4 文では、こうしたことが、黒人英語が鈍さ(dimness)と近づきやすさ(approachability)を兼ねるそうえ、それゆえ銀行、保険そして医師を代表するのに理想的な理由であることが述べられている。このことから、実験は第 2 段落の、黒人英語は知性の低さを示すものとして罵られることが多いけれども、それでも、広告主はまさに「黒人的な」発音をする声優を探し出そうとするのはなぜか、という問いに対して答える上で挙げられたものだと考えられる（そもそも第 1 文では、こうした黒人英語にまつわる論点は、このカナダの実験でよく説明され得る、と述べられている）。これらの記述を踏まえて選択肢を考察する。

- A は「公用語に関する理解[見方]が重要な社会政策に着想を与えた」という意味だが、本文では政策への影響には言及がない。

B の「身体的な見た目が、公告において影響力を持つ」についても同様である。

C は「言語によって表現される友好性は重要な国(民)の性格だと見なされた」という意味。フランス語の方が、英語よりも友好的であるというイメージをその話者に付与したことは実験からうかがえるが、その友好性が国民的性質として見なされたという記述はない。

D は「劣ると考えられる言語が魅力的な性質をも有することがある」という意味で、これは第 2・3 文で、英語に対してフランス語が格式が低く、賢くないように捉えられるが、フランス語の方が温かく、より友好的な印象を与えたと述べられていることと合致する。また、こうしたことを踏まえて述べられている第 4 文とも合致する。

正解は D。

14
キンズラー博士の社会言語学に関する書籍について誤ったものを選ぶよう求める問題。

A は「暴力的な言葉の衝撃の値は、幼少期におけるよりも、大人になってからの方がより高い」という意味。彼女の本については第 6 段落で詳しい記述がある。第 2 文で、言語がどれだけ人間の脳に対して刷り込みを行っているか、また人間がそれに対して敏感であるようにかに神経学的に条件付けられているかを彼女が明らかにしている、とある。また、第 3 文では、たとえ幼少期の後、言語を失い、大人になってもはやそれを話さずとも、最初の言語によって永久に刻み込まれた、深層の神経の設定のために、それを学ぶことは簡単だと述べられている。罵倒の言葉についてはこの後の第 4 文にて、母語で言われたときの方が、後に学んだ言語で言われたときより人々が感情を刺激されるということが述べられているのみであり、A のようなことは本文では述べられていない。

B は「1 年生になる前の子どもたちにとって、人々は話す言語によって劇的に分類されている」という意味。第 5・6 文にて、キンズラーの研究では、幼稚園児(kindergartners)に英語を話す白人の少女の動画を見せた後で、フランス語を話す白人の成人女性と、英語を話す黒人の成人女性の動画を見せたところ、子どもたちは、その（最初の動画の）白人の少女が黒人女性になるだろうと考えたこと、アイデンティティを特徴付けるものとしての彼らの言語の感覚はそれほど深く埋め込まれていたのだ、とある。B はこれらの文の内容と合致する。

C は「脳の構造上のハードウェアは最初の言語によって大きく影響を受ける」という意味で、A の解説で触れた第 2・3 文の内容と合致する。

D は「小学校中学年の生徒は民族性が変化しないことを理解する」という意味。B で触れた第 5・6 文の後に、第 7 文にて、一方で 4 年生は決定的な要因として人種を内在化していた、と述べられていることと合致する。

正解は A。

15
私たちが他人をどのように話すかによって理解するということを踏まえ、言語による差別に関するキンズラーの懸念として結論付けられることは何かと問う問題。筆者は最終段落第 1 文で、キンズラーが主として関心を抱いているのは言語による差別だと述べている。そして、第 3 文で、それ（＝言語による差別）が礼儀のある社会において最も許容できない偏見の 1 つであることを指摘した後で、第 4 文で、キンズラーによる「言語による偏見は、人間の文化の基本構造の一部である」という指摘を引用している。続く第 5・6 文も同じキンズラーの引用であり、そこでは言語による差別が法により正当化され、文化によって容認され、そしてそれが起こっているときでも人々が気付かさえないほど頻繁に行われていること、また普通で典型的なものとして捉えられることが述べられている。このようなキンズラーの引用部分からうかがえる彼の懸念を適切に示したものが正解となる。

A は「高い階級の人々を言語に基づいて特定するという行為は幼少期から始まっている」という意味。第 2 文にて、人種や性差別、階級差別について議論する中でも、話し方に関して偏見を抱いてしまうということについてはあまり時間をかけて考えることがない、と述べられている。しかし、A のようなことがキンズラーの懸念であるということはいくつかない。

B は「社会を改革してより社会的平等を促進することは非常に困難である」という意味。これは、そもそも言語による差別が文化構造の基礎を成してしまっており、それが生じていても気付かないほど普通だとキンズラーが述べていることと整合性がある。B はキンズラーの懸念について結論付け得ることだと言える。

C は「英語はより『正しく』聞こえる。なぜなら話者の方がより賢く感じられるためである」という意味。後半の内容は第 4 段落第 3 文でカナダの実験の結果として述べられているが、それと前半の内容とは本文で特に結び付けられて論じられているわけではない。また、そもそもこの実験はキンズラーの著書との関連で言及されているものではなく、ましてや彼女の主たる関心である言語による差別との関連で述べられているのでもない。

D は「アーティストはより「黒人風」に聞こえるように努める。なぜなら彼らは言語学者によって評価されていると感じているためである」という意味。前半部分は第 2 段落第 1 文の内容と関連している。こうしたことの理由は第 4 段落第 3・4 文にて示されているが、そこでは言語学者による評価は触れられていない。また、C 同様、やはりこれもキンズラーの主たる関心である言語による差別とは直接関連しない。

正解は B。

16
第 7 段落第 6 文に含まれる下線部(16)は、「言語による差別(Linguistic discrimination)は普通の、典型的なものと捉えられ、それゆえに」という内容に続く部分に位置しているから、下線部は言語による差別が当たり前と見なされている結果として生じている事態について述べている。先行する第 4・5 文の内容は言語による差別に関するキンズラーの引用である（その内容は 15 の解説を参照）。下線部の主語 it は、第 4～6 文で話題となっている、単数形の Linguistic discrimination を指す。これが生じていても人々が気付かないほど頻繁に生じるものであり、普通で典型的なものとして捉えられているということの帰結として「それ（＝言語による差別）はレーダー[探知機]の下を飛行する[飛び交う]のである」と言われる場合、レーダーは人間の知覚などの比喩であり、それによって認識・補足されない形で言語による差別が行われているということが意味されているものと考えられる（beneath[under] the radar は「(人に)気付かれることなく」などの意味で成句的に用いられる）。

上記のような文脈の考察から、偏見に気付くことを意味する B の「自分たちへの偏見が存在する場合、たいていの人々は(それが)分かる[たいていの人々は、いつ自分たちへの偏見が存在するか理解する]」、また意識的に変革しようとするという意味になる D の「たいていの人々は偏見を普通のことだと捉えているが、それを变えたいと願っている」は候補から除外できる。

A は「たいていの人々は、自分たちの言語[話し方]において偏見を表現していることに気付いていない」という意味。これは、第 4・5 文と、第 6 文下線部までの記述を理由として述べられることとして適しており、beneath the radar の含みも反映していると言える。

C は「たいていの人々は意識的に差別をしてもいいし、偏見に対して積極的に反応もしない」という意味。この前半部分は、ほぼ A と同様の内容であり、それゆえ妥当なものであるように思われる。ただ、it が Linguistic discrimination を受けているところ、C においてはその差別が言語に関するものだということが示されていない（後半の bias にも、linguistic などの形容詞や、既に言及のあるものに限定されることを示す the などが付されていない）。また、下線部が、言語による差別が人に気付かれない形で生じるという意味であるところ、言語による差別の様態だけでなく、それへの反応にも言及する C はやや過剰であると言える。第 2 文にて we can be biased という表現があるが、他動詞としての bias は「(人)に偏見を抱かせる」などの意味であり、「(人)を偏見の目で見ると」などの意味はない。よって、この段落では、話し方について人々が偏見を抱いてしまうことが意識されないことが主題となっていることとなり、この点からしても A の方が適切であると言える。

正解は A。

17
下線部を含む文では so A that B「とても A なので B」という構文が用いられている。主語 It は前文の it すなわち、Linguistic discrimination「言語による差別」を指している。下線部は is の補語であり、so に修飾されている。下線部のような箇所動詞の現在分詞や過去分詞が入るのは有り得るが、A は原形であるため、これは不適である。よって、形容詞となっている他の選択肢のいずれかが下線部の意味に近いこととなる。下線部は「言語による差別」を説明する語であり、その程度の基だしさは that 節以下の「私たちがそれ（＝言語による差別）について考えさえしないほど」で示されている。

B は「無意識の」という意味で、人以外のものに対して叙述的に用いられて、「無意識になされる」などの意味にもなる。第 7 段落第 2 文以降の内容からして、下線部がこうした意味であっても極めて自然だが、ubiquitous は「どこにでもある[遍在的な]」という意味の形容詞であるから、これは不適。

C は「不自然な」という意味だが、that 以下で示される程度の基だしさに関する記述や、直前の文の最初の節の記述とも合致しない。E の「独特[唯一]」も同様の理由から不適。

D の「普遍的な[広く存在する]」は that 以降の記述やこれまでの文脈と合致する意味であり、実際 ubiquitous と同じ意味となる。

正解は D。

解答					
18	D	19	B	20	C
23	A	24	B	25	B
コメント					
18	若者が下線部(18)の on to something という状態にあると筆者が述べる際、その理由は何かが問われている。第 1 段落第 1 文では、「SF やファンタジーを読むことに『夢中の(hooked)』若者」が主部となっており、この若者たちの状態を説明するものとして下線部が置かれている。直後の第 2 文では、このジャンルを読むことは価値のない行動だというよくある誤解にもかかわらず、SF とファンタジーを読むことは若者がとりわけ COVID-19 の世界的大流行の中で生活するストレスと不安に対処する助けになるかもしれない、とある。第 3 文でも、多くの人々は SF やファンタジーを「文学的」だと思えないかもしれないが、フィクションというものはすべて若い読者に批判的思考の技能と感情的な知性を生じさせ得るのだと研究によって示されている、とある。こうした誤解と、それに対する反論となるような研究に触れた後で、筆者は第 4 文では SF にはそれ独自の力があるのかもしれない、と述べている。これらの内容が、「SF やファンタジーに『夢中の』若者」が on to something であるかもしれないという冒頭の陳述を支える実質的な理由だと考えられる。このような同段落の文脈を踏まえて選択肢を考察する。 A は「彼らは情報を分析して評価するという自身の個人的な能力を発展させる」という意味。こうした能力は、第 3 文にある「批判的思考の技能」の言い換えであると捉えることもできる。ただし、develop や their own を用いた A の書き方だと、あたかも既にある程度自分が有している能力をさらに発展させるという意味になるのに対し、第 3 文のように generate「…を生み出す」を用いた場合、それまで持ち合わせていなかったものがもたらされるという含みになる。この点で A と第 3 文にはややずれがある(また、be on to O は「O に気付いている」などという意味であるところ、A のような理由から、「(略)若者は、何かに気付いているのかもしれない」と述べられるのでは、理由と帰結が上手く対応しないと考えられる)。 B は「彼らは(COVID-19 の)世界的大流行下のストレスと予測できない日々の生活から解放される」という意味。第 2 文にて、SF・ファンタジーを読むことは、世界的大流行の中で生活することのストレスや不安に対処する上で役に立つこともあると述べられている。この部分と、ストレスから解放されるという部分とが合致すると見なしたとしても、予測できない日々の生活そのものから解放されるとは述べられていないので、これも不適。 C は「彼らはよくある誤解に対する価値のある解決策を実行に移すことができるようになる」という意味。上記のように、SF などを読む若者が、よくある誤解とは裏腹に、実は独自の効能がある行為をしているのかもしれないということは同段落で述べられている。しかし、そうした誤解に対する何らかの解決策を実行に移すことができるなどということは述べられていないので、これも不適。 D は「通俗的な理解とは反対に、彼らは SF を価値のあるものとして認識している」という意味。上記のように、よくある、つまり通俗的な理解では SF などが無価値とされるので、その反対の理解においては SF が価値のあるものとされるというのは、本文に照らして正しいと言える。また、第 2・3 文に基づいて、筆者自身も SF にはそれ独自の効能があるのかもしれないと述べている。こうした、自身が効能があると考える、SF を読むという行為に夢中となっている若者は「何かに気付いている」のかもしれないと著者が言う場合、その「何か」とは、SF の効能を指すと考えられる。こうした考察から、SF に夢中な若者が下線部のようにであるかもしれないと述べる理由として、筆者が D のようなことを念頭に置いている、推測しているということは読み取ることができる。下線部そのものの意味が問われているわけではないとはいえ、be on to O と recognize の意味の対応からしても、D が本設問の解答として最適であると考えられる。 正解は D。				
19	空所(19)を含む第 2 段落第 1 文では、Parents [...] guidance で「親は、それが道徳面での指導(moral guidance)を提供してくれる場合、文学を若者にとって『良い』ものと考えてきた」となっており、その moral guidance を主格の that 節が修飾している。reflects「…を反映する」と their own「彼ら自身の」の後に位置している空所には、reflects の目的語となる名詞が当てはまる。文学が提供する道徳の指標が、親たち自身の何を反映していれば、親たちが文学を若者にとって『よい』と考えるかが問題となる。 A は「固定観念」という意味で、この語は第 2 段落第 5・6 文にて用いられている。第 5 文には、SF などの本は、現実には葛藤を生じさせるものではないので、価値がないという固定観念に言及がある。親たちの固定観念がこうしたものであるとして、こうした固定観念を反映する道徳面での指導、というのは不自然である(この固定観念が道徳に関連するとは考えにくい上、親たちが文学に反映してほしいと思うものの表現として、「固定観念」は不適切である)。 B は「価値観」という意味で、これを空所に補った場合、親たちは、彼ら自身の価値観を反映する道徳面での指導を文学が提供する場合に、文学を若者にとって『よい』ものと考えてきた、と述べられることとなる。具体的にどういった価値観であるかは述べられていないにせよ、この陳述自体は、文学に反映してほしいものの表現として「固定観念」などという言葉を使うかどうか、という点で A の場合のような不都合はなく、納得のいくものである。 C の「現実」は、第 6 文にて言及がある。同文では、直前の文で言及されている固定観念が、若者は(読書などを通じて)現実の鏡像に取り組める場合にのみ、板挟み状態に対処することを学べることができると、述べられている。つまり、こうした現実の鏡像を提示・反映する作品が若者にとってよいということが示唆されているので、空所に C を補っても自然だと考える向きもあるかもしれない。しかし、空所を含む that 節の意味上の主語は「道徳面での指導」であり、それが反映するものとしては、親たち自身の「現実」よりも親たち自身の「価値観」の方が適切であると言える。 D の「相反する感情」は同段落第 5 文にて、「一部の人々が SF に対して抱く継続的な相反する感情」として言及されている。D の「相反する感情」もこうした修飾がなされるものだとして、やはり A や C 同様、こうした感情を反映する道徳面での指導というのは考えにくい。 E は「機能」や「役割」という意味だが、これもやはり親たちが、文学が提供する道徳面の指導に反映してもらいたいと思う自身に関する物事として B より適切であるとは言えない。 正解は B。				
20	親たちが SF とファンタジーを下線部(20)の escapist nonsense「現実逃避的な無意味なもの」だとして批判する根拠となる、親たちの考えが問われている。第 2 段落第 3・4 文では、問題は、まじめな文学であれ現実逃避的な無意味なものであれ、ジャンルは何であれ文学がいかに教育的な機能を果たすかである、というのが親と教育者の間の、子供が何を読むべきかに関する対立の核心だと述べられている。そして続く第 5 文には、SF に対する一部の人々の相反する感情は、それらの本がおそらく現実の人間の板挟み[ジレンマ]状態を呼び起こすことがないため、ほとんど価値がないという固定観念の一因になっている、とある。SF がほぼ無価値だとする点で、この固定観念は SF を「現実逃避的な、無意味なもの」と捉える親が有するものと言える(第 4 文で教育者にも言及があるが、同段落のトピックセンテンスとなる第 1 文で親の見方が取り上げられていることから、第 5 文の ambivalence も、それによって引き起こされる stereotype も、親のものだと考えられる)。そして、第 6 文ではより詳しく、このような固定観念は、読んだり見たりするものを含む現実の鏡像[現実に似たもの]に関わることによつてのみ、若者は人間の板挟みへの対処を身に付けることができるということを前提にしているのだと説明されている。この第 6 文で、第 5 文の固定観念の前提として指摘されている考え方を適切に反映した選択肢が解答となると分かる。 A は「それらの物語の遠くかけ離れた設定が子どもの頭[心]を社会的状況から遠く離れたところへと連れて行く[至らせる]」という意味。「遠くかけ離れた設定」は第 3 段落第 2 文などとは関連するが、ここは親たちの思考に触れたものではない。第 2 段落第 6 文で指摘されている、固定観念の前提となる考え方の裏返しとして A のようなことが言えなくもないが、より直接的にこの考え方を言い換えている C が最適である。 B は「人生の困難を乗り越えることは実践された経験を通して学ばれる技術である」という意味。「人生の困難を乗り越えること」は第 2 段落第 6 文の to cope with human dilemmas の言い換えとなり得るが、ここでは本などが提供するものも含めた「現実の鏡像」に関わることを通してそうしたことを学ぶということが述べられている。よって、実際の体験を意味するような「実践された経験」という部分が不適である。 C は「若者は現実を正確に反映したものを読むことによって問題について学ぶ」という意味であり、上記の固定観念の前提を適切に言い換えている。 D は「文学の他のジャンルと比べ、言葉遣いと考えがとても単純である」という意味だが、こうしたことは述べられていない。 正解は C。				
21	下線部は「相反する感情」や「葛藤」などという意味。下線部(21)を含む第 2 段落第 5 文では、SF に向けられたこうした感情は、これらの本は、現実の人間の葛藤を呼び起こすことはないため、価値のないものだという固定観念の一因となる、とされている。こうした固定観念の一因となり得る親の「相反する感情」というのが、同段落第 1 文で示されているような親の文学に対する見方を指すと捉えてみる(ある特定の道徳面での指導の有無に基づいて文学の是非を判断する考え方は、現実の人間の葛藤を生み出さない作品を価値のないものとする考え方につながり得る)。この場合、下線部の「相反する感情」というのは、道徳的指導をもたらすのであればよい、そうでなければだめといったような、SF という 1 つのものに向けられる両義的感情を示すこととなる。こうした感情と対応する選択肢はどれかが問題となる。 A は「他人と一緒に座ることが不快なので、人々が映画を好まない」という意味。これは、映画そのものに向けられた両義的感情というより、単にそれに付随する事象の否定的評価となってしまう点で、不適である。このことは、C「物語が飲み込みづらいので、人々が演劇を好まない」、D「ジョークがあまりにも多くのスラングを用いるので、人々がコメディを好まない」にも当てはまる。 これらに対し、B の「敗者と呼ばれるのが侮辱的なので、人々がスポーツ[運動競技]を好まない」は、競技そのものに付きものの勝敗をめぐる、勝者と呼ばれたいという感情を前提にした陳述になっている。勝って勝者と呼ばれるのならスポーツはよいが、そうでない場合は嫌うというのは、「相反する感情」の例として適切であると言える。 正解は B。				
22	SF における、下線部(22)の critical distance が何を指すかが問われている。第 3 段落第 1・2 文では、深刻な社会問題などに関する説得力のある物語を提供するために SF などが現実の鏡像である必要はなく、設定や登場人物が普通ではないということこそが SF などが有用である理由であり、そこにこそその価値があるのだと言われている。下線部を含む第 3 文においては、SF などでは様々な深刻な問題に取り組む若者の例を若者が目の当たりにするのだが、それは critical distance を提供する設定や時代においてなのだ、とされている。続く第 4 文の冒頭にある This distance はこの下線部を指していると考えられるところ、同文ではそれが、複雑性に取り組むと同時に、彼らの創造性を働かせて社会的な課題に対処する様々な方法を考える手段(avenue)を読者に提供するのだと述べられている。以上のような内容を踏まえて選択肢を考察する。 A は「若い読者には解決できない社会的、経済的、政治的問題」という意味。これは第 3 文と関連し得るが、仮に下線部がこの内容を指すとする、第 3 文は、SF においては、そうした解決できない問題を提供する設定や時代において、若者が、様々な深刻な問題に取り組む若者の例を目の当たりにするという、冗長なものとなる。こうした問題によって、第 4 文で示されている手段が与えられるというのも考えにくい上、critical や distance の意味との対応の点でも、これが正解だとは考えられない。 B は「若い読者と物語の強力な登場人物との違い」という意味。上記の第 2 文の内容を踏まえた場合、現実の人間である若い読者と、普通ではない登場人物との間に差があることで、第 4 文で述べられているような手段が与えられるというのは十分考えられることである。ただし、第 2 文では登場人物は powerful「強力な」、「効能のある」ではなく extraordinary「普通ではない」で形容されている(they are powerful の they は直前の文の Science fiction and fantasy を指す)。B はこの点でひっかけを狙ったものだと判断する。 C は「若い読者に与えられる、深刻な問題と状況についての観察(結果)」という意味。同段落第 1 文から第 3 文 In [...] relevant の内容からして、(現実と異なる)設定などから、若い読者がこうした観察を得られるというのは整合性がある。また、こうした観察をすることで、第 4 文で述べられているような手段が読者に与えられるというのをもた自然であると言える。critical には、「決定的な」以外に(第 1 段落第 3 文での用法のように)「批判的な[批判に関する]」という意味もある。批判するための距離を与えるということは、結果として距離を置いた形で問題を批判的に見ることを可能にするということであるとも言えるので、「観察」との対応も悪くない。これが正解となる。 D は「若い読者を不快で不確かな状況からはるか遠くへと解放すること」という意味だが、こうしたことについては何ら言及がない。また、こうしたことによって、第 4 文で言及されているような手段が読者に与えられるとも考えにくい。 正解は C。				
23	近年の研究で、SF とファンタジーが若い読者の脳にもたらさないとされているものはどれかを問う問題。 A の「大人と意思疎通するための能力」は本文で挙げられていない。 B は「曖昧な概念を考察する能力」という意味。最終段落第 1 文にて「不快でいることについて心地よさをもたらし、不確かさと曖昧さを探索し、若者を動的な主体、自身の運命を切り抜け、形作者として描くフィクションの形式よりも、今日の不確かさに対処するためのよりよい方法はあるだろうか(いや、ない)」と述べられている。ここは近年の研究との関連で述べられているのでは必ずしもないが、フィクションが「不確かさと曖昧さを探索」するものだとしてされていることから、それを通して B のような能力を得られるということは示唆されていると言える。同文で SF と明確に言及されてはいないものの、第 2 文で「彼らに、SF を読ませておきなさい」と述べられていることからしても、B は SF がもたらすものだと言える。 C は「科学を現実へと適用する能力」という意味。第 4 段落第 1 文で SF とファンタジーを読むことが、読者が世界を理解するのに役立つことがあると述べられており、その具体的説明として、第 2 文 exposure to outside-the-box [...] on science にて、「型にはまらない、創造的な物語にふれることで、科学に基づいて現実に取り組む能力が拡大されるかもしれない」と述べられている。C も SF がもたらすものとして適切である。 D は「社会問題を理解する能力」という意味。第 3 段落第 3・4 文にて、SF などの物語を読むことで、若者が、深刻な社会問題に取り組む若者の例を目の当たりにすること、SF などの設定が提供する critical distance によって、複雑性に取り組むと同時に、彼らの創造性を働かせて社会的な課題に対処する様々な方法を考える手段を読者が手にするということが述べられている。D はこの部分と合致する。 正解は A。				
24	SF 文学が、どういった仕方で若い読者の resilience「回復力」、「(望ましくない出来事などへの)適応力」を喚起するのかを問う問題。resilience は may (actually) produce の目的語に当たる。同文の主部は the critical [...] literature「この種の文学(=SF やファンタジー)によって促進される批判的な思考と脳の習慣」であるから、resilience はそれにより生じ得るものだということとなる。また、resilience という単語が用いられている第 5 段落第 3 文では、SF を読むことで、resilience を得るための方策を生み出すことができるようになるといった旨が述べられており、この方策というのが、下線部を含む第 5 文にて言及のある批判的な思考と脳の習慣なのだと考えられる A は「それ(=SF 文学)は彼らの科学的な評価の技能を向上させる」という意味。この陳述自体は第 4 段落第 2～4 文の内容に照らして妥当なものと言えるが、上記のように、第 5 段落第 5 文では、resilience をもたらすものとして、SF を読むことで向上した科学的な評価という、かなり限定的な技能は挙げられてはいない。 B は「それは問題に対して客観的な見方をするための方策を与える」は、批判的思考と脳の習慣を言い換えた上で、第 5 段落第 3・5 文を適切に言い換えている。これが正解。 C は「それは社会が彼らに求める教訓や道徳の理解を提供する」という意味だが、これは第 5 文の the critical thinking [...] literature の言い換えになり得ない。 D の「それは世界的大流行下の日々のストレスと不確かさから彼らを解放する」という意味で、これも C 同様不適。 正解は B。				
25	若者に対する筆者の基本的な考え方を最も適切に表現している選択肢を選ぶよう求める問題。 A は「彼らは複雑な現実を経験することから自分自身を守るべきだ」という意味。第 1 段落第 4 文や第 5 段落第 2 文から、筆者は SF・ファンタジーが独自の効能を持つものであり、それゆえ若者にはそれを読むがままにさせておくのがよいのだと主張していることが分かる。そして、第 3 段落第 3・4 文からは、SF を読むことで複雑性に取り組むための手段を得られることを筆者が指摘していると分かる(22 の解説参照)。筆者は、SF を読むことで複雑性に取り組むことを推奨しているのだから、A は筆者の若者に対する考えとして不適だと分かる。 B は「彼らは複雑な現実に対処するための自分なりの方法を獲得すべきだ」という意味。筆者は第 1 段落で、SF などとはよく否定的に捉えられるが独自の効能があるかもしれないこと、第 2 段落では SF が否定的に捉えられる理由として、それが現実世界の鏡像を提示するものではないということを書いていく。それに対し第 3 段落では、社会問題などについての説得力ある物語を提示するために、SF が現実の鏡像である必要はなく、むしろその差異によって、読者が複雑性に取り組んだり、想像力を働かせて社会的課題に対処する方法を検討したりするための方策が得られるのだと述べている。そして、第 4 段落では、SF が現実世界の理解にも資することを述べ、第 5 段落第 3・5 文では、SF において、若者は自分自身が自ら自分なりの回復戦略を作ることが可能であるということに気付くことができるということ、毎日の生活や現実が普通はもたらさない回復力[適応力]を、この種の文学が促す批判的思考などはもたらしてくれるかもしれないのだ、と述べている。第 1 段落第 1 文からうかがえる通り、SF は典型的には若者が読むものとされている。若者にとっての SF の効用として上記のようなことを述べた上で、筆者は第 5 段落第 2 文にて、若者には SF を読ませておくよう主張している。これらの記述から、B は筆者の若者に対する考え方として適切と言える。 C の「彼らは SF とファンタジーを読む能力を身に付けるべきだ」、D の「彼らは自らの現実を SF とファンタジーに投影すべきだ」といったことは本文では述べられておらず、筆者の背後の考えとして不適。 正解は B。				